



〈12〉



その後、大人八人でご神体

のみこしをかつて三峰川を渡り、富良野地区の天伯社との間を往復する。美篤地区の天伯社総代・白鳥厚志さん(左)は「毎年、ダムの水量を調節してもらってまで三峰川を渡っている」と言い、人々の祭りに懸ける思い入れの深さを感じた。(札木良)

伊那市の美篤、富良野地区の天伯社に伝わる七夕祭り。三峰川に洪水を起こす疫病神を鎮めるために、毎年八月七日に行われる。

言い伝えによると、室町中期の一四二七(応永三十四)年、上流の高遠地区にいた天伯様が洪水で富良野地区に流れ着き、その後の洪水で対岸の美篤地区に流れ着いたとされる。これを縁に両地区に天伯様を祭ったのが祭りの始まりとされ、一四七二(文明四)年から続いているという。

祭りは、美篤地区の天伯社で子どもたちが飾り竹を持って、鬼役を務める大人二人の周りを「さんよりこより(さんあ、寄ってこいよの意味)」と唱えながら回る。三度回ったのち、飾り竹で鬼をめった打ちにして家族の健康などを願う。

さんよりこより (伊那市美篤、富良野)



飾り竹で子どもたちにめった打ちにされる鬼たち(伊那市美篤)

健康を願う竹で鬼退治

平成25年8月8日掲載
中日新聞/朝刊/18面(南信)